

## 着物と私(12)

### 「ドレスと私、時々着物」

木下 遥香



「着物と私」ということで、今回初めて人生の中で自分がどれくらい着物と関わってきたかを考えてみた。すると七五三の時と成人式の時のたった2回しかなかった！（私は五才の時しか七五三をしていない。）というのも、シンデレラや白雪姫が大好きだった私は着物より断然ドレス派だったので、着物というものに全く興味がなかった。だから七五三の時も実は着物ではなくひらひらのお姫様ドレスを着る予定だった。しかし熱を出してしまい結局別の日に嫌々着物を着させられて写真を撮ったのだ。貴重な晴れ舞台にも拘わらず、レースいっぱいドレスを着ることの出来なかった私の表情は至って不機嫌。そんな初めて着物を着た私の写真は今でも家のリビングに飾られている。

突然だが、私にとって大切な宝物がいくつかある。大切な人たちから貰った手紙とか、吹奏楽部時代の真っ黒な楽譜とか尊敬する恩師からの言葉だとか。もちろんどれも大事で大切に順番なんて付けることは不可能だが、祖母が成人式のためにと買ってくれた綺麗な振袖だけは別。成人式の振袖にすら興味のなかった私は、適当にレンタルした着物を着ようとこれまた適当に考えていた。ある日祖母の家に遊びに行った時、「これ遥香ちゃんに似合うと思って」と言うと、突然祖母が振袖を出してきたのだ！なんてサプライズ！立派な箱に入って畳紙に大事そうに包まれた振袖はとても繊細そうで素手で触れることさえ何となく躊躇う



程だった。

十何年振りに着た着物は想像していた通り重し、帯は苦しいし、草履ははき難いし、絶対結婚式はウェディングドレスにしよう！と思ったけれど、祖母が私の振袖姿を見て「やっぱりこの振袖遥香ちゃんに似合う。買ってよかった。」なんて泣きながら言うものだから、これから着物派になろうかなって心の中で思った。今、私の家のリビングルームには五才の不機嫌な顔で着物を着た私の写真と二十歳の笑顔で振袖を着た私の写真が隣合せて並んでいる。



きのした はるか（英米語学科4年次生）